

1月19日「お招きに応えました」サムエル記上3:1~10 ヨハネ福音書  
1:35~51

今日は、二つの御言葉から、「招き」の記事を聴きました。

まず、ヨハネ福音書から最初の弟子たちが選ばれる物語。皆さんが良くご存じなのは、ガリラヤ湖で漁をしていたペトロやアンデレたちに「人間を獲る漁師にしてあげよう」と語りかける物語だと思います。けれども、ヨハネ福音書は他の福音書とは描き方が異なっています。洗礼者ヨハネに付き従っていた二人の弟子がイエスの弟子へといわば鞍替えするのです！二人の弟子は師匠ヨハネがイエスを指して「見よ！神の小羊だ！」と証しするのを聴きます。彼らはイエスに興味をもってイエスが泊っている宿で一緒に泊まることにしました。この1晩の間に二人には劇的な変化が起きたようです。そのうちの一人はペトロの兄弟アンデレでしたが、彼は「私たちはメシア（救い主）に出会った！」とイエスが神の子、救い主であることを確信するようになるのです。

この一晩のうちに、いったい何があったのか？何が二人を、その師匠である洗礼者ヨハネをも凌駕する「神の子」だと認めさせるほどの劇的な回心を起こさせたのか、福音書は何も語りません。「男子三日会わざれば刮目して見るべし」という言葉もありますが、イエスと過ごす中で劇的な何かがあったのかもしれない。ちょうど次の火曜日には、3月に行われる中高生のためのスプリングキャンプの打ち合わせに行きます。2泊3日のキャンプですが、このたった3日間で、洗礼を受ける決意をしたり、もう辞めようと思っていた教会生活を続ける決意をしたり、劇的な変化が現れる子どもたちが毎回現れ、いつも驚かされます！聖霊はすごい働き方をします。そんな体験が二人の弟子にもあったのかもしれない。

また、ここで「泊る」と訳されているギリシャ語は「留まる」という意味でヨハネ福音書では少し特別な意味を持っています。「わたしはまことのぶどうの木。わたしの愛にとどまっていなさい(15:9)」とか「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である(8:31)」とか、そんな風にイエスさまとの関係が暗示される言葉です。ですから単に一泊を共に過ごしたのではなく、イエスに「何を求めているのか？」と問われ、「来なさい」と招かれ、イエスと「泊まる(繋がる、愛にとどまる)」ことを決意する、そんな弟子となる経緯が暗示されているとも解せます。

とにかく劇的な変化を経たアンデレは兄弟ペトロにもイエスを紹介しペトロも弟子となりました。

さらに、翌日にはガリラヤでフィリポとナタナエルを弟子にします。ナタナエルはイエスのことを「ナザレから何か良いものが出るだろうか？」（それだけ田舎だった）と疑いますが、そう訝るナタナエルのことをイエスは見抜いて語りかけられます「わたしはあなたがフィリポから話しかけられる前から知っていた」イエスは、多くのことをその人自身よりご存じで見抜いておられます（たとえば井戸で話したサマリア人の女）。私たちの弱さも罪深さも、あらゆることを私たち自身よりよく理解されたうえで、それでもキリスト者として招かれるのです。ナタナエルはそんなイエスの愛の奥深さの一端にふれて、彼が神の子であると信じるようになりました。イエスは、彼にこんな風に告げます。

「51節 はっきり言うておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見るようになる。」これがイエスの弟子として招かれるということです。ヤコブが天へのはしごを見たように、イエスは神の国と私たちの間の障壁を取りさり、私たちの罪を赦し、神と和解させてくださる方なのです。そんな救いの道へと招かれるということなのです！

もう一か所、サムエル記から少年サムエルに初めて神様の言葉が臨んだ物語を聴きました。週報にも載せましたが、小さな子どものサムエルが「主よ、お話してください。僕は聞いております」と素朴に祈る姿は印象深いものがあります。私たちも御言葉を聴くときにはそうありたいと願います。この後、成長した預言者サムエルはサウルを見出し、ダビデに油を注ぎます。偉大な人物となります。何が偉大か？神の言葉をまっすぐに語る責務を果たしたことです。時には人には言いづらいことであっても・・・イスラエルの民が王を求めたとき、独裁制への脅威を民に伝えた（それまでは神を唯一の王とする民主制だった）。そうして立てたサウルが神の言葉に背いたとき、サウルに代わる指導者が現れることを告げます。そして今日の物語では、まだ少年であったサムエルが最初に神様から聞かされた言葉は預言者としては師であり、育ての親でもあるエリが過ちを犯しているこ

と、エリの家には神の裁きが下るというものでした。サムエルは生涯、預言者として神の言葉に従って歩みましたが、それは神の正しさの前の人間の愚かさ、醜さ、弱さ（人間の罪）と向き合い続けた日々だったのです。

私たちがイエスキリストさまから招かれることにはそんな面もあります。イエスキリストが開かれた天（神の国）へと招かれる。罪深い私たちを「友」と呼び、赦し、救われる。私たちはそんな招きを受けています。けれども、同時にそれは厳しい道のりでもある。招かれた私たちは毎週の御言葉に罪を自覚させられ、神の正しさの前に、自らの弱さを負いながら歩むことになるのです。

教会の歴史を見てみると、どれだけ多くの過ちを犯してきたか、よくわかります。特にローマ帝国の国教となつてからは、既存の国家や権力と結びつくことで繁栄を享受する一方で、本来立つべき神の祝福が最も注がれる弱い者たちへの愛をおざなりにし、社会的な対立を引き起こしてきました。多くの宗教戦争があり、互いに裁きあってきました。「キリスト教は赦しや愛を説くくせに、世界の戦争の歴史のほとんどがキリスト教によって引き起こされている。」という批判を聴くこともありますが、真摯に耳を傾けるしかありません。特に再びイランなどのイスラム圏の国々との戦争の色合いが強くなってきた今、改めて罪の歴史に目を止め、神の前に悔い改めて進まなければならないと思います。

そういう意味でこの後歌う讃美歌 448 「お招きに応えました」の4節は新鮮です。「世に生きる その現場で 右左 決める時に みこころにかなう道を 選ばせてください、主よ」

昨年行われた、分区の役員研修会で、講師の黒田議長はこんなお話をされました。「どうして私たちが礼拝を最も大切にするのか？それは私たちが簡単に過ちを犯すからです。」人生においても、教会の働きにおいても・・・だから聖書に現された神の言葉に常に聴き、招かれた者として悔い改めながら進むべき道を求めて歩むのです！「世に生きる その現場で 右左 決める時に みこころにかなう道を 選ばせてください、主よ」

最後に、私たちの教会の話を。今日の週報には、次年度に向けて、こんなものを載せました。**多度津教会・愛光保育園 共働キリスト教精神(案)**

「人間は神によって創造され、愛されている存在である。神はその一人一人に異なる賜物とかけがえのない命を与えられる。私たちは互いに愛し合い、喜び合いながら共に生きる未来(神の国)を実現するために共に働く。」

少し厳しい話を続けてきました。けれども、やっぱり私たちの歩みは祝福されていると思います。私たちはイエスさまから神の国を見せてもらっているからです。それは梯子の隙間から垣間見る程度かもしれませんが、そこは分かち合いの国、赦しあいの国、喜びあう国、そして互いに愛し合う国です。私たちキリスト者は何より地上にこの神の国を実現するために召されているのです。次年度から、愛光保育園とは法人が分かれた歩みを進めることになりました。けれども、そのことによって全く無関係になるわけではありません。むしろこれまで以上に、その関係を深めて、一緒に働いていくのです。その第一歩として、教会と保育園で同じキリスト教精神を掲げることになりました。これは、これまで愛光保育園で掲げられてきたキリスト教精神を、私なりに、教会と共通して掲げられるよう少し手を加えたものです。

改めて新年度にお話ししようと思いますが、前半は私たちの人間観があらわされています。「人間は神によって創造され、愛されている存在である。神はその一人一人に異なる賜物とかけがえのない命を与えられる。」後半はそのような人間観をもって、私たちが追い求める理想が現わされています。「私たちは互いに愛し合い、喜び合いながら共に生きる未来(神の国)を実現するために共に働く。」私たちは神の国の実現のために働くのです！私たちがキリストに繋がる教会のメンバーとして集まるのは、このため、愛光保育園がキリスト教精神によって子どもたちを育てるのもすべてはこのためなのです。

私たちは毎週御言葉を聴きます。それはイエスが架けてくださった神の国とのほしごを少し昇って、神の国を垣間見るようなものです。その理想を掲げて地上を神の国へと近づけるために働くのです。時には間違えたり、自分の罪に絶望しそうになる時もあります。そんな時は「主よお語りください！しもべは聞いております」と一緒に御言葉に耳を傾け、祈りましょう。御言葉に励まされて歩むのです！それが私たちだけに与えられた大きな希望ではないでしょうか？